
白い犬

宮村 鴻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い犬

【Nコード】

N2223C

【作者名】

宮村 鴻

【あらすじ】

夢で見た白い犬。お前はどこで僕を待っているのだろうか？

(前書き)

以前書いた短編です。
元ネタは友人の考え、それに私が肉付けをして、一編の話にしました。

この頃、僕はいつも同じ夢を見る。

真っ白い白銀の世界に、僕は一人で歩いている。どこかからの帰り道なのか、僕は公園の前を通りかかる。

そこにはいつも子犬がいる。そいつは真っ白で雪の中にとくと、さもすれば見落としてしまいそうなのだけど、絶対に僕は見落とさない。そいつも絶対に僕を見つける。

そうして、とても嬉しそうに笑うのだ。声を出して笑うのではない、でも、僕にはそいつが笑っているという事が分かった。

そいつは、嬉々として尻尾を振り、僕に駆け寄ってくる。そして、そこで気付く。

その子犬には、左の前足が無かった。

いつもそこで目が覚める。最悪な目覚め。

その子犬は、今もどこかで僕を待っているのだろうか。

白い雪の中で、僕を。

十
十
十

「ねえ、加藤さんの家に子犬をもらいにいくわよ？」

母が僕を呼ぶ声。今日は母の友人の加藤さんの家に子犬をもらいにいくのだ。

そうして、加藤さんの家に行った僕たちが見つけたのは、健康な

子犬の中に埋もれる、白い、左前足のない犬だった。

「母さん、こいつがいいよ」

「え？ その子、足が無いでしょうに」

「いいんだ。こいつが僕を呼んでたんだ。大丈夫、こいつはちゃんと歩けるし、きつと不自由はないんだよ」

「そう…なの？ あなたがそう言うなら、加藤さん。この子を頂くわ」

加藤さんは不思議そうに僕を見た後、箱の中から子犬を取り出した。

子犬はひくひく鼻を動かしながら、僕の方に近寄り、そして、夢のままに僕に笑いかけてきた。

「そうだな。お前は、雪とでも名付けようかな」

まだ小さい雪を僕の目線の位置まで持ち上げて、そう呟いた。

母は、安直ねえ、とぼやいていたが、僕には一番似合っている名前前に思えた。

「夢に見たまでに、育つのはいつ頃だろうな？」

その頃にはきつとあの公園で、雪は僕に向かって笑うのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2223c/>

白い犬

2010年10月12日03時34分発行